



# パンドラの匣

太宰 治

新潮文庫

パンドラの匣 はこ



定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草6K

昭和四十八年十月二十五日印刷  
昭和四十八年十月三十日発行

著者 太宰治 だざい ぢ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二  
東京都新宿区矢来町七一  
電話東京(〇三)二六〇二一一  
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・塚田印刷株式会社 製本・有限会社加藤新栄社

© Michiko Tsushima 1973 Printed in Japan



新潮文庫

パンドラの匣



新潮社版



目次

正義と微笑……………七

パンドラの匣……………一八五

解説 奥野健男



パ  
ン  
ド  
ラ  
の  
匣<sup>はこ</sup>





正義と微笑

わがあしかよわく  
のぼりがたくとも  
たのしきしらべに  
ききていさみたつ

けわしき山路やまじ  
ふもとにありて  
たえずうたわば  
ひとこそあらめ

四月十六日。金曜日。

すごい風だ。東京の春は、からっ風が強くて不愉快だ。埃が部屋の中にまで襲来し、机の上はざらざら、頬ほべたも埃だらけ、いやな気持だ。これを書き終えたら、風呂へはいろろ。背中にまで埃が忍び込んでいるような気持で、やり切れない。

僕は、きょうから日記をつける。このごろの自分の一日一日が、なんだか、とても重大なもののような気がして来たからである。人間は、十六歳と二十歳までの間にその人格がつくられると、ルソオだか誰だか言っていたそうだが、或いは、そんなものかも知れない。僕も、すでに十六歳である。十六になったら、僕という人間は、カタリという音をたてて変ってしまった。他の人には、気が附くまい。謂いわば、形而上けいじじょうの変化なのだから。じっさい、十六になったら、山も、海も、花も、街の人も、青空も、まるっきり違って見えて来たのだ。悪の存在も、ちょっとわかった。この世には、困難な問題が、実に、おびただしく在あるのだという事も、ぼんやり予感出来るようになったのだ。だから僕は、このごろ毎日、不機嫌ふきげんなんだ。ひどく怒りっぽくなった。智慧ちゐの実を食べると、人間は、笑いを失うものらしい。以前は、お茶目で、わざと間拔けた失敗なんかして見せて家中の人たちを笑わせて得意だったのだが、このごろ、そんな、とぼけたお道化が、ひどく馬鹿らしくなって来た。お道化なんてのは、卑屈な男子のする事だ。お道化を演じて、人に

可愛がられる、あの淋しき、たまらない。空虚だ。人間は、もっと真面目に生きなければならぬものである。男子は、人に可愛がられようと思ったりしては、いけない。男子は、人に「尊敬」されるように、努力すべきものである。このごろ、僕の表情は、異様に深刻らしい。深刻すぎて、とうとう昨夜、兄さんから忠告を受けた。

「進は、ばかに重厚になったじゃないか。急に老けたね。」と晩ごはんのあとで、兄さんが笑いながら言った。僕は、深く考えてから、答えた。

「むずかしい人生問題が、たくさんあるんだ。僕は、これから戦って行くんです。たとえば、学校の試験制度などに就いて、――」

と言いかけたら、兄さんは噴き出した。

「わかったよ。でも、そんなに毎日、怖い顔をして力んでいなくてもいいじゃないか。このごろ少し痩せたようだぜ。あとで、マタイの六章を読んであげよう。」

いい兄さんなのだ。帝大の英文科に、四年前にはいったのだけれども、まだ卒業しない。いちど落第したわけなんだが、兄さんは平気だ。頭が悪くて落第したんじゃないから、決して兄さんの恥辱ではないと僕も思う。兄さんは、正義の心から落第したのだ。きっとそうだ。兄さんには、学校なんか、つまらなくて仕様が無いのだろう。毎晩、徹夜で小説を書いている。

ゆうべ兄さんから、マタイ六章の十六節以下を読んでもらった。それは、重大な思想であった。僕は自分の現在の未熟が恥ずかしくて、頬が赤くなった。忘れぬように、その教えをここに大きく書き写して置こう。

「なんじら断食するとき、偽善者のごとく、悲しき面容をすな。彼らは断食することを人に顕ざんとて、その顔色を害うなり。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。なんじは断食するとき、頭に油をぬり、顔を洗え。これ断食することの人に顕れずして、隠れたるに在す汝の父にあらわれん為なり。さらば隠れたるに見たもう汝の父は報い給わん。」

微妙な思想だ。これに較べると、僕は、話にも何もならぬくらいに単純だった。おっちょこちよいの、出しゃばりだった。反省、反省。

「微笑もて正義を為せ！」

いいモットオが出来た。紙に書いて、壁に張って置こうかしら。ああ、いけねえ。すぐそれだ。「人に顕さんとて、」壁に張ろうとしています。僕は、ひどい偽善者なのかも知れん。よくよく気をつけなければならぬ。十六から二十までの間に人格が決定されるという説もある事だ。本当に、いまは大事な時なのである。

一つには、わが混沌の思想統一の手助けになるように、また一つには、わが日常生活の反省の資料にもなるように、また一つには、わが青春のなつかしい記録として、十年後、二十年後僕が立派な口髭でもひねりながら、こっそり読んでほくそ笑むの図などをあてにしたがら、きょうから日記をつけましょう。

けれども、あまり固くなつて、「重厚」になりすぎてはいけない。

微笑もて正義を為せ！ 爽快な言葉だ。

以上が僕の日記の開巻第一ペエジ。

それからきょうの学校の出来事などを、少し書こうと思っていたのだが、ああもう、これはひどい埃です。口の中まで、ざらざらして来た。とても、たまらぬ。風呂へはいろいろ。いずれまた、ゆっくり、などと書いて、ふと、なあんだ誰もお前を相手にしちゃいないんだ、と思って、がっかりした。誰も読んでくれない日記なんだから、気取って書いてみたって、淋しさが残るばかりだ。智慧の実は、怒りと、それから、孤独を教える。

きょう学校の帰り、木村と一緒にアズキを食いに行つて、いや、これは、あす書こう。木村も孤独な男だ。

四月十七日。土曜日。

風はおさまったけれど、朝はどんより曇って昼頃ちよつと雨が降り、それから、少しずつ晴れて来て、夜は月が出た。今夜は、まず、きのうの日記を読みかえしてみ、そうして恥ずかしく思った。実に下手だ。顔が赤くなつてしまった。十六歳の苦惱が、少しも書きあらわされてない。文章が、たどたどしいばかりでなく、御本人の思想が幼稚なのだ。どうも、仕方がない。いま、ふと考えた事だが、なぜ僕は、四月の十六日なぞという、はんばな日から日記を書きはじめたのだらう。自分でも、わからない。不思議である。前から日記をつけたかと思つていたのだが、おととい兄さんから、いい言葉を教えられ、それで興奮して、よし、あしたからと覚悟したのかも知れない。十六歳の十六日、マタイ六章の十六節。けれども、それは皆、偶然の暗合に過ぎな

い。つまらぬ暗合を喜ぶのは、みっともない。さらに深く考えてみよう。そうだ！ 少しわかったところもある。その秘密は、十六日という日数にあるのでは無くて、金曜日というところにあるのではないかしら。僕は、金曜日という日には、奇妙に思案深くなる男だったのだ。前から、そんな癖があったのである。変にくすぐったい日であった。この日は、キリストにとっても不幸な日であった。それ故、外国でも、不吉な日として、いやがられているようだ。僕は、別に、外国人の真似をして迷信を抱いているわけでもないが、どうも、この日を平気で過すわけには行かなかった。そうだ、僕は、此の日を好きなのだ。僕には、たぶん、不幸を愛する傾向があるのだ。きつと、そうだ。なんでもない事のようにだけけれど、これは重大な発見である。この不幸にあらがれるという性癖は、将来、僕の人格の主要な一部分を形成するようになるのかも知れぬ。そう思うと、なんだか不安な気もする。ろくでもない事が起りそうな気がする。つまらん事を考え出したものだ。でも、これは事実だから仕方がない。真理の発見は必ずしも人に快樂を与えない。智慧の実は、にがいものだ。

さて、きょうは木村の事を書かなければならぬのだが、もう、いやになった。簡単に言えば、僕はきのう木村に全く敬服したのである。木村は学校でも有名な不良である。何度も落第して、もう十九歳になっている筈だ。僕は、きょうまで木村とゆっくり話し合ってみた事はなかったが、きのう学校の帰りに、木村にひっぱられて、おしるこやに行つて、アズキを食べながら、はじめに人生論を交換してみた。

木村は意外にも非常な勉強家であった。ニイチェをやっているのだ。僕は、ニイチェの事は、



まだ兄さんから教わっていないので、なんにもわからず、ただ赤面した。僕は、聖書の事と、それから、蘆花のことを言ったけれども、かなわなかった。木村の思想は、ちゃんと生活に於いても実行せられているのだから凄いのだ。木村の説に依れば、ニイチェの思想はヒットラアにつながっているのだそうだ。どうしてつながっているか、木村がいろいろ哲学上の説明をしてくれたが、僕には一つもわからなかった。木村は実に勉強している。僕は、この友を偉いと思った。もっと深くつき合ってみたいと思った。彼は、来年は陸軍士官学校を受験するそうだ。やはり、ニイチェ主義とも関係があるらしい。でも、陸軍士官学校は、とてもむずかしいそうだから、だめかも知れない。

「よしたほうがいいぜ。」と僕は小声で言ったら、木村は、ぎょろりと僕をにらんだ。おそろしかった。木村に負けずに、僕も勉強しようと思った。僕は、英単一千語をやって、それから代数と幾何を、はじめからやり直そうと、その時に、決意した。木村の思想の強さには敬服しても、なぜだか、ニイチェを読むとは思わなかった。

きょうは、土曜日である。学校で修身の講義を聞きながら、ぼんやり窓の外を眺めていた。窓一ぱいにあんなに見事に咲いていた桜の花も、おおかた散ってしまつて、いまは赤黒い萼だけが意地わるそりに残っている。僕は、いろいろの事を考えた。おととい僕は、「むずかしい人生問題が、たくさんあるんです。」と言つて、それから「たとえば、試験制度に就いて、——」と口を滑らせて、兄さんに看破されてしまったが、僕のこのごろの憂鬱は、なんの事は無い、来年の一高受験にだけ原因しているのかも知れない。ああ、試験はいやだ。人間の価値が、わずか一時

間や二時間の試験で、どしどし決定せられるというのは、恐ろしい事だ。それは、神を犯す事だ。試験官は、みんな地獄へ行くだろう。兄さんは僕を買いかぶっているもんだから、大丈夫、四年から受けてパスできるさ、と言っているが、僕には全く自信が無い。けれども僕は、中学生生活は、もう、ほとほといやになったのだから来年は、一高を失敗しても、どこか明るい大学の予科にでも、さっさとはいってしまうつもりだ。さて、それから僕は一生涯の不動の目標を樹立して進まなければならぬのだが、これが、むずかしい問題なのだ。一体どうすればいいのか、僕には、さっぱりわからない。ただ、当惑して、泣きべそを掻くばかりだ。「偉い人物になれ！」と小学校の頃からよく先生たちに言われて来たけど、あんないい加減な言葉はないや。何がなんだか、わからない。馬鹿にしている。全然、責任のない言葉だ。僕はもう子供でないんだ。世の中の暮らしのつらさも少しずつ、わかりかけて来ているのだ。たとえば、中学校の教師だって、その裏の生活は、意外にも、みじめなものらしい。漱石の「坊っちゃん」にだって、ちゃんと書かれているじゃないか。高利貸の世話になっている人もあるだろうし、奥さんに嘔鳴どなられている人もあるだろう。人生の気の毒な廃残者みたいな感じの先生さえ居るようだ。学識だって、あんまり、すぐれているようにも見えない。そんなつまらない人が、いつもいつも同じ、あたりさわりの無い立派そうな教訓を、なんの確信もなくべらべら言っているのだから、つくづく僕らも学校がいやになっってしまうのだ。せめて、もっと具体的な身近かな方針でも教えてくれたら、僕たちは、どんなに助かるかわからない。先生御自身の失敗談など、少しも飾らずに聞かせて下さっても、僕たちの胸には、ぐんと来るのに、いつもいつも同じ、権利と義務の定義やら、大我と小我の区別や